

写真de俳句 入選作品 3

「写真de俳句」のすすめ 4

〈天〉 入選作品 6

- 第13回 気球と原野 6
- 第14回 ウィスキーの小瓶 8
- 第15回 裏庭になごり雪 10
- 第16回 麗らかな川辺 12
- 第17回 アルペロベツロの種物屋 14
- 第18回 小さな町の桜 16
- 第19回 マーガレットとベニシジミ 18
- 第20回 散歩中の紫陽花 20
- 第21回 夏の山でハイキング 22
- 第22回 朝露がビーズのように 24
- 第23回 カメラと夕焼け 26
- 第24回 秋晴の公園 28
- 第25回 浜辺の焚火 30

〈地〉 入選作品 32

〈人〉 入選作品 100

おうちde俳句大賞 受賞作品 177

- 第1回 2019年 178
- 第2回 2020年 180
- 第3回 2021年 182
- 第4回 2022年 184

本書は、WEBサイト「おうちde俳句くらぶ」(<https://ouchihaiku.com>)連載「第13〜25回 写真de俳句」選句欄(選者…夏井いつき)にて選ばれた、上位「天」「地」「人」入選作品と講評を収録しています。(2021年12月〜2022年12月までの掲載分)

入選作品

写真de俳句

「写真de俳句」は写真を兼題としております。「おウチde俳句くらぶ」という観点において、写真を発想の踏み切り板として使うことは大変有効です。写真を糸口として、これまでの人生の様々な記憶を引き出すことができますからです。

写真を兼題とする場合、次のような切り口が考えられます。

A 写真と全く同じ光景を詠む。

—— 写真を見ていない人の脳内に、写真の光景を再生させる。

B 切り取られた写真の外を想像する。

—— どんな光景がひろがっているのか。どんな人がいるのか。どんなモノがあるのか。

C 写真の光景の時間軸を動かしてみる。

—— 夜になればどうなるか。朝になればどうなるか、等

D 自分が写真の中にいたら、どんな行動をとるだろう。

初めて写真で俳句を作るみなさんは、次の方法から始めてください。

- 1 写真の中にある言葉や連想した言葉を、できるだけ沢山書きとめる。
- 2 採取した単語を、季語と季語ではないものにグループ分けする。
- 3 季語ではないグループの単語を一つ選んで、十二音の【俳句のタネ】を作る。

○○○○○ + 季語とは関係のない十二音 【俳句のタネ】

季語とは関係のない十二音 【俳句のタネ】 + ○○○○○

- 4 【俳句のタネ】に似合った【五音の季語】を探す。

《季語の選び方のコツ》

- ・ 楽しそうな【俳句のタネ】ならば、楽しそうな【五音の季語】を取り合わせる。
- ・ 悲しそうな【俳句のタネ】ならば、悲しそうな【五音の季語】を取り合わせる。

俳句は実践によつて学ぶものですから、理屈を読み囁るばかりでは前に進めません。まずは一句。最初の一步を踏み出しましょう。

夏井いつき

気球と原野



黒板に気球の仕組み小鳥来る

冴

兼題写真から「気球」という言葉を採用し、そこから教室に発想を飛ばしました。

「黒板」一面に書かれているのは、「気球の仕組み」の図解でしょうか、数式でしょうか。気球という大きな袋に、熱せられた空気がたまり、人が乗っている籠もろとも上昇していく。巧く考えられているものだと感心します。

とはいえ、ヘリコプターや飛行機のように金属で守られているのではなく、己の生身が空気に触れているわけですから、気球で空をゆく気持ちは、どちらかという小鳥たちに近いのかもしれない。

「黒板」に書かれている「気球の仕組み」は、

空を飛べない人類の、空への憧れでもあります。小鳥の羽の構造を不思議に思うこと、気球の仕組みに興味を抱くこと、そんな小さな好奇心から科学の進歩は動き出すのです。

取り合わせた秋の季語「小鳥来る」が、飛ぶ気球と近いと考える人もあるかもしれませんが、ここにあるのは科学的な仕組みの説明が書き込まれている黒板のみです。「小鳥来る」は、その教室の窓をのぞきにくる秋の小鳥たち。その様子は、科学的考察に目をきらきらさせる子どもたちの様子と響き合います。取り合わせという技法の、付かず離れずの法則にのっとった明るく楽しい作品です。

●季語——小鳥来る「秋・動物」



値上がると買った原野に月のぼる

全速

兼題写真の原っぱには、キリンらしき小さな影が見えます。そこから「原野」という言葉を見つけ出したのですね。同じ単語を使っている句は他にもありましたが、「値上がると買った」という発想がユニークにして、ちよつと生々しくて、笑ってしまいます。

「値が上がる」と思つて、予想して買った土地。その目論見が完全にハズレてしまったのか、これから上がるという期待がまだ続いているのか。どちらにも読めるのが、この句の面白さ。下五の「月のぼる」が絶妙の味わいではありませんか。

●季語——月上るつきの上る「秋・天文」

へりがバリビるブルべるボ秋の雲

姉萌子

読んだとたん、谷川俊太郎さんの『ことばあそびうた』を思い出しました。

兼題写真の俯瞰の目線から、ヘリコプターを想像するところまではありそうな発想ですが、そこからのジャンピングが愉快すぎます。ヘリコプターが飛ぶ音を様々に表現した句は見てきました。この妙ちくりんな動詞の活用のようなオノマトペが痛快。一度しか使えない手ではありませんが、コロンブスの卵の楽しさ。これからヘリコプターを見上げるたびに、この活用？を呟いてしまいそうです。

●季語——秋の雲あきのくも「秋・天文」

手袋の毛だま気球の点火待ち

謙久

中七の途中に意味の切れ目がある句またがりの型を巧く使っています。「手袋の毛だま」というアップから、「気球」へと映像が切り替わります。気球を上げるための点火を待っている場面が鮮やかに立ち上がります。上五の季語「手袋」によって、下五「待ち」という寒い時間感実感として伝わります。

「毛だま」と「気球」の大小の形が、それとなく重なるのも面白い配慮。「待ち」と切れのない終わり方も、この時間がまだ続いている感じを表現できています。

●季語——手袋てぶくろ「冬・人事」

秋雲を屋上で見ませんか、とは

丹波らる

この兼題写真から、こうきたか！という、その企みに拍手です。

「秋雲を屋上で見ませんか」と誘われているのです。この誘いの目的は一体何なのでしょう。恋のきっかけを探すための誘いか、プロポーズか、隠してきた身の上話か、はたまた退職の勧めか。

誰がなんのためにこの言葉を投げかけているのかを想像するだけで、短編集が幾つも書けるような展開ではありませんか。

最後の「く、とは」の部分の言い回しが絶妙。戸惑いなのか、喜びなのか、警戒心なのか。読者である私たちの想像は、とめどなく広がっていきます。

●季語——秋雲あきぐも「秋・天文」

◆大賞 台所部門

たまねぎをむききれば神さまのばしよ ツナ好

◆最優秀賞

リビング部門 あんま機は家長の玉座室の花 東京墮天使

寝室部門 桜東風二段ベッドの解体式 銀の風

玄関部門 下駄箱のほこりのたまに冬の蜘蛛 たかみたかみ

風呂部門 ドライヤーは強赤子泣く寒夜よ 朱夏

トイレ部門 血便が痛し家業も継がぬ春 中平保志

◆優秀賞

リビング部門 腕時計のままに炬燵の庇護を受く 仁和田永 藍創千悠子

沈黙に点く愛の日の夜のテレビ ふるてい ありあり

見渡せど掃除機の道無く溽暑 はなぶさあきら 星埜黴円
働いて賜る朝のビールかな 多喰身・デラックス 宮井そら

台所部門 南国のよるは冷たしガスコンロ あっけ羅漢 越智空子

ディスプレイのレモン最後の香を放つ あなうさぎ ノセミコ

還暦や蕪を煮てるが恋もする 桂月 比良山
愛なんぞ入れても冷蔵庫は四角 ちやうりん 牧野牙

寝室部門 定時薬飲ませ終え我が夜長あり 香亜沙 武井かま猫

受験子のベッドに眠る仔犬かな はんばあぐ ゆうじい

綿寄りしぬいぐるみ抱く子へ毛布 千曉 河豚ふく子
痛まない起き方模索して朝寝 みづちみわ ⑦パバ